

第4回山形県立図書館活性化検討委員会 議事録

期 日：平成27年11月9日（月）

時 間：13:30～15:15

場 所：あこや会館 ベにばな会議室

1 開 会

2 山形県教育委員会挨拶【渡辺教育次長】

3 協 議【座長：逸見委員長】

- ・協議に先立ち、図書館をめぐる最近の報道について事務局から説明。
- ・冒頭で前回の検討委員会で提示した素案からの追加・変更点、調査結果の概要について事務局から説明。

(1) 基本計画（案）について

(ア) 調査結果の概要について

新藤委員

今回、調査結果をまとめているが、利用者が図書館を利用するにあたって駐車場を最も欲していることが改めて確認できた。高校生・大学生等や経済界の意見を見ると、飲み物を持ち込んだり、おしゃべりできるカフェの要望が強い。研修・ミーティングができるスペースについての要望もある。また、子育て中の母親グループからは話ができたり、読み聞かせができるスペースについて要望が出ている。

選書・蔵書について、「娯楽や趣味の本を増やしてほしい」という意見があるが、県立図書館と市町村図書館では役割が違う。市町村図書館はより利用者のニーズに密着した選書を行うべきであり、県立図書館は利用者が直接欲しくないような本であっても、例えば山形県に関する本や、今後利用者が調査研究を行うにあたり必要になってくる専門書等を中心的に揃えてよいと思う。このため、利用者のニーズにそのまま応えようと蔵書構成のバランスや市町村図書館との差別化の問題が出てくる。ニーズを全く無視することもできないので、そことの兼ね合いが難しい。

また、1階はBGMを流すとしているが、現県立図書館ができた平成2年の開館時はBGMを流していたらしい。図書館についての当時の特集本にその旨の記事があり、取材した記者が少々うるさいと感じたというコメントが載っている。現在、BGMを流していないことから、何らかの議論があったと思う。経緯がわかれば教えてほしい。

大沼委員

どの立場の人も、より居心地のよい空間を求めていることがわかったが、居心地のよさを持ちながらも、「学びの場」としての県立図書館の環境を併せ持つことが大事だと思う。

岡崎委員（代理）

県立図書館のイメージの中で「気軽に利用できない堅い雰囲気」があるが、人の問題なのか空間の明るさやデザインの問題かわからないが、空間の質は重要になってくると思う。アンケート調査の選択肢に空間の質についての項目があったかわからないが、カフェへのニーズがこれだけ高いということは、単にそこでお茶が飲めることだけではなく、空間の質がすごく重要になってくる。なぜ人がカフェに行くかという、喉を潤すとかおしゃべりをするだけではなく、空間を楽しみに行くことが重要な要素になっているので、その読み取りが必要である。

「行きたくなる講座やイベントを開催する」とあるが、今後検討していくことになると思うが、ソフト部分を誰がどのようにつくっていくかが重要になってくると思う。行きたくなるというのは、主観的なものなのでどのように満たしていくか。やればいいということではない。空間をせっかく新しくして、とても居心地のよい場所にしても、そこをどう使いこなすかというデザインが重要。そこに置かれるチラシ一つとっても美しいものであったり、魅力的なものにしていくことが求められる。行きたくなる講座やイベントを開催するということとリンクしてくる。そこで働く人たちが魅力的なものを作れるように、育てていくことも必要である。

選書については、県立図書館にしかない本を選書すべきと思う。もともと私は雑誌の出版社に勤めていたことがあるが、いわゆる娯楽とか雑誌系の新刊本をどんどん貸してしまうとなると、出版社としては心が痛いところもある。前から言われていると思うが、いわゆる街中の書店や出版社と競合しないようなことも配慮してほしい。雑誌・新聞とか娯楽主義の中でも回転の速いものは、貸出ではなくカフェでの閲覧にするという対応もできると思う。

（イ）基本コンセプト・大規模改修の実施等について

新藤委員

基本コンセプトに沿って具体的な項目が今回出されていると思う。開架冊数を約 17.8 万から約 40 万冊に拡大するのは、目標ではなく 40 万冊全て入るような設計にするのか。

回答（大場生涯学習施設主査）

40 万冊入るようにしたいと考えているが、本の飾り方や出し方で変わってくるので 40 万冊は目標と考えている。

新藤委員

開架冊数というのは、あくまで目標ということなので 40 万冊を厳密に守らなくてもいいと思う。開館してみて若干の変動があってもよい。

先月末に大学の共同研究で武雄市図書館を見学して、館長からいろいろと話を聞く機会があった。武雄市図書館の本の展示の仕方やサービスについて、本の陳列やディスプレイの見せる部分だけに気をつけて、利用しやすさについては考えていないような気がする。狭い空間に 20 万冊を置くことを最初にうたったため、手が届かないような高いところにまで本棚を設置し、地震の際に本が倒れないようにバーをつけて、事実上上の本は取りにくくなっている。一番下の本棚も腰をかがめないと見にくいし、取ることができない。最下段から最上段まで本棚を密集させることは、図書館が知の殿堂として

利用者により印象を与えるが、ディスプレイや冊数にこだわって取りにくいところに本を置いてしまったりしている。利用者が取りやすい姿勢、見やすい本棚を最初に考えたうえで、冊数を考えた方が順番として正しいのではと思う。ただ、館長が自ら動いて利用者一人一人に声をかけるなどして、公共図書館らしくなるように持っていき、大変な努力をしていると感じた。

最初に数値や目標を設定して進めることは重要だが、開架冊数 40 万冊が 39 万冊だからといって図書館の機能として大差がない、数字が独り歩きしないようにする必要があると感じた。

コンシェルジュの機能は明確化させた方がいい。いわゆる司書とコンシェルジュの機能が別であることを、利用者が役割の違いをわかるように案内板やパンフレットに明記することが必要だと思う。

調査相談能力の向上について、図書館に調査相談・レファレンスサービスがあることが非常に重要と考えている。調査結果を見るとレファレンスサービスがあること自体よく知らない人が多い。大々的に県政番組やインターネットを活用して、無料で利用できることを紹介すれば、少しは認知度が上昇すると思う。レファレンスを周知するとなると、担当する専門の司書もいないと困るので、司書を安定的に確保することが必要。同時にレファレンスの技術や専門性が問われるので、研修を充実させるべき。

図書館と他機関との連携については前からよく論じられているが、うまくいっていない。最近、文部科学省が学校図書館との連携をうたっている。また、障がい者サービスや高齢者サービスも言われるが、視覚障がい者サービスだと点字図書館がある。私が知る限り、公共図書館と点字図書館が連携している事例はない。厚生労働省が管轄する福祉施設である点字図書館と教育施設である図書館では似たようなことをやっても、運営が別々で連携がうまくいっていない。障害者差別解消法（障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律）が来年施行され、点字図書館との連携も視野に入れた方がいい。

レファレンスでわからないことがある場合の連携は全国的にみてもうまくいっていない。天童市の市立図書館と旧東村山郡役所資料館は同一の指定管理者で、郷土史に関する高度なレファレンスは資料館の学芸員が対応するというのをやっていた。同一の指定管理者であるので連携がうまくいっていて、これが別々だと連携ができない。図書館でわからないと分からずじまいで終わってしまうので、県立博物館といった他機関との連携・調整をどうするか考える必要がある。単に紹介するだけでなく、レファレンスを回して回答してもらうという横の連携を調整するのは難しいが、レファレンス機能の強化になる。全てを図書館で受けようとするとなると対応できるキャパシティも限られているので、専門的なものは大学図書館や博物館に回すなど他機関にも手伝ってもらうなどの姿勢を示すことができれば、ひいては全体の質の向上につながると思う。

大沼委員

前回の検討委員会で、1人で仕事をしている社会人がパソコンを持ち込んで仕事ができる場所があるといいと発言したが、パソコン席として反映しているのか。

回答（大場生涯学習施設主査）

大規模改修の実施の部分で、2階の吹き抜け周辺カウンターで、パソコンやタブレット

ト端末が利用できる電源のあるカウンター席を設けるイメージでまとめた。

大沼委員

こういった人が図書館を求めているので是非大事にしてもらいたい。また、有料でもスキャナーやプリンターもあればなおいいと思った。

基本コンセプトの4つの柱の「ひろがる」は、大規模施設の改修の実施の部分でどこに反映されているか。

回答（大場生涯学習施設主査）

別途、具体的方策の体系で整理したが、例えば子ども用エリアの充実やデッキエリアの設置は「ときめく」図書館でもあり、「ひろがる」図書館でもあり、各内容は必ずしも4つの柱のうち1つだけに当てはまるものではないと考えている。大規模改修の実施の中に、「ときめき」感のある改修、「ひろがり」感のある改修も入っている。

大沼委員

人の輪が広がっていくことはいいと思うが、読み聞かせグループや子育て支援グループなどの団体だけに特化せず、図書館の企画運営に関わる人を巻き込んで、関わる図書館になってほしい。図書館だけでクローズさせないで、オープンな図書館になってほしい。

岡崎委員（代理）

基本計画（案）に記載されているように実現できればいいと思っている。特に選書に関して、本は毎年たくさん出版されているので、新しい本を含めて厳選していいものを揃えていければいいと思う。確かにCCC（武雄市図書館）の問題のようなこともあるが、それに萎縮することなく、何か図書館のイメージを変えるようなことをしてほしい。

(ウ) 管理運営の充実について

- ・管理運営の充実についての議論に入る前に、基本計画（案）の該当部分、資料2、資料3について、事務局から説明。

新藤委員

開館日に関して、休館日は市町村図書館とずらした方がよい。市町村図書館で休みになっていない金曜日を休館日にしてもいいかもしれないが、金曜日は週末なので利用が多いと見込まれる。週の真ん中の水曜日または木曜日を休館としてはどうか。

また、開館時間は延長した方がよい。現行の19時閉館から21時まで延長するのもいいが、21時だと山形駅前でも人通りは大分少なくなるので、20時とか20時30分閉館でもいい。アンケートをとって、20時、20時30分以降での入館状況を調べて元に戻してもいい。ただし、一度延ばした開館時間を短くすると印象が悪くなるかもしれない。

大沼委員

休館日について、私自身は「図書館の休みは月曜日」という印象があり、月曜日に訪問して閉まっていたとしても納得する。ただ、月曜日しか休みでない人もいるので、例

えば1・3週目は月曜日、2・4週目は木曜日と曜日で休館日を振り分けてもいいかもしれない。そうすると全く図書館に行くことができない人はいなくなると思う。

次に、開館時間については、もう少し長い方が使いやすい人もいると思う。山形県ではどれくらいニーズがあるか分からないため、いきなり22時まで開けてしまっただけは利用者がいないということもあるので、少しずつ開館時間を延ばしていったらどうか。平日だけ長くしている図書館は働いている人を対象としてのことなので、平日だけ延長してもいいのではと思った。

調査相談能力の向上と情報発信はとても重要。居心地がよく、自由度が高く、遅くまで開いている場所というのは他の施設でもやろうと思えばできることであり、他の図書館が全てそうなった場合、県立図書館の役割は何なのかを考えないといけない。新しい価値を生み出したり、何か困ったことがあったら課題解決できる場所だということを強く訴えていくことが必要。困ったら県立図書館に行けばいいということを知らない人が多く、今まで図書館に行かなかった層が図書館に行ってみようと思うきっかけになる。

また、岡山県立図書館では司書が部門別に分かれていることは面白いと思った。山形県立図書館がどのように進めていくかもあるが、課題解決をしていくのであれば、仕事、生活、歴史、自然、子ども、文学など、各部門に対応できる専門的な担当がいると思うと心強いと思う。

それから、限定的でなく様々な団体と協力して賑わいづくりを進めて、関われる図書館であってほしいと思う。

岡崎委員（代理）

休館日と開館時間だが、私個人としては、365日開館とは言わないが、休みがない方がいいと思う。全ての場所が毎日開いている必要があるのかという問題があって、併設するカフェについて、毎週1日休まないといけないとするとカフェの経営が成り立つのかといった図書館の経営でない部分の課題が出てくると思う。このため、設計を工夫することで、カフェやアクティブラーニングができる部屋のように曜日に関係なく使いたい場所は毎日開いている、時間も遅くまで開いているとすることは可能だと思う。設計とリンクしてくるが、そういう使い方もできる。毎日開ける必要がない場所は、使い勝手に考える方法もある。そうすると、例えば夜開いていた方がいい部屋とは何かとかを考えていく必要があると思う。やはり、人が集まって一緒に勉強したりする場所が少ないという話をよく聞く。所属する東北芸術工科大学の図書館も21時閉館で、学生のニーズに答えられていない。少し遅くてもサークルの活動や勉強会でこういう図書館が使えるとありがたい。公民館も21時閉館のところが多い。少なくとも21時くらいまで開いていればいいと思う。

管理運営について、優秀な司書が配置されることを願っている。コンシェルジュやコーディネーターが入ってくることが想定されていると思うが、選書などの問題にしっかり対応できたりするようになればいいと思う。多様な主体と連携した賑わいを創出する仕組みづくりについては、連携という言葉は基本計画等でよく出てくるが、実際にやるのは相当大変。コーディネーターのスキルについて、生まれながらに気質をもっていて、人と集い、繋がりやすい人はいるが、そういう人たちは他の仕事に就いていることが多い。こうした中で、どのように人を育てていくかを想定しておくことが必要。コーディ

ネータースキルの養成は日々必要になってくることなので、訓練のための予算を組んでしっかり考えた方がいいと思う。それから、コミュニケーションをどのようにとるか。ユーザー等の来てくれる人もそうだが、来てくれない人とのコミュニケーションを図書館がどうとるのが大切だと思う。開館時間をどうするかについてもいろいろなアンケートをとることで方向性が出るかもしれないが、これからの時代は一緒に考えることが大事。無印良品やユニクロなどでは既にやっているが、ネット上やワークショップでコミュニケーションをとり、ユーザーと一緒に考えて考えることが重要。21時になって周りが暗く誰も歩いていない中で図書館を開くのはどうかということを県民に投げかけて、そこまで開けておく必要があるのかという議論をすると納得される。コミュニケーションのデザインをしていく必要がある。図書館も1つの人格として県民とコミュニケーションができるといいと思う。

コーディネーター、コンシェルジュのところともかかわるが、知の集積としての図書館でもあるので、何でも聞いて下さいというスタンスをとれることが望ましい。図書館がもっている知識だけで対応できないものが出てくる可能性があるが、それは図書館の管轄外であると言ってしまうと、いつでも来て下さい、何でも相談して下さいということは嘘になってしまう。それこそ連携だと思うが、どれだけ県内の知識、活躍している人、活動している団体・場所と繋がっているかが重要になってくる。簡単ではないが、どうにかしようとするような心構えが重要。電話で調べて懸命に相談者のニーズを満たすことができるような人が必要と思う。

新藤委員

休館日・開館時間について、埼玉県立図書館等でやっているが、子ども向けのコーナーなどを早く閉めるという方策もある。一律に夜遅くまで延長すればいいというわけではないので、そのようなことも考えてほしい。

管理運営の充実について、司書の調査能力を向上するということと連携が重要であると思うが、司書の研修を充実させるとか、市町村図書館の司書や学校図書館の職員のスキルアップのための研修充実をうたっているが、研修となると県立図書館の職員が講師となることだけでなく外部講師を登用・活用して研修会を開くことになると思う。どんな人がいて何ができるか、何を頼むか、県内外の人材の把握を最初にしたうえで実施することが重要だと思う。

連携については、点字図書館などの他の類似機関との協力が重要。武蔵野プレイスでは地元の複数の大学との連携講座を開催しているが、山形県には大学コンソーシアムやまがたがある。事務所は山形駅前にあるが、そこで公開講座をやっているが場所が分かりにくいという評判がある。いっそのこと県立図書館・遊学館内で公開講座をやってもいいと思う。大学コンソーシアムやまがたに場所を提供するだけでも、県立図書館が新しい事業をやっていると思われ、これは実現を目指していいと思う。

岡山県立図書館の取り組みは図書館界の中では有名である。岡山県立図書館では司書の人的基盤が充実しており、司書の採用枠を設けて専門的な司書を養成している。こういうことをするのであれば、ある程度投資が必要で、例えば公務員の採用試験で図書館情報学に詳しい人を専門職で採用しないと専門的なニーズに対応できる司書の配置は難しい。文系・理系の学問についてのレファレンスとなるとかなり高度な内容になり、

まず質問者が何を言っているのかがわからないといけない。研究者的な司書、大学院の修士課程を修了した者を採用するなどしないと対応が難しい。一朝一夕になかなかできるようなことではないと思う。大学図書館では理系のかなり高度なレファレンスもあるが、都道府県・市町村図書館では物理学や化学についての高度なレファレンスは少なく、郷土の歴史や文学についての人文科学系や起業やビジネスについての社会科学系についてのレファレンスが全般的に多い。児童資料の紹介や読み聞かせの仕方などのレファレンス以外のこともあるが、全部門をそろえなくてもニーズが高いと思われる部門に力を入れてみるとよいと思う。

(エ) 全体を通して

岡崎委員（代理）

ハードの居心地のよさもすごく重要で、それをするだけで印象が相当変わってくるので、設計について山形らしさみたいなことに関してもより良い設計者が選ばれるようにしてほしい。人の問題も非常に大きいと思う。結局、愛される図書館にならないと人は来なくなるので、見かけだけではない中身の充実、魅力化が重要。人は簡単には育成できないので、育成のための予算の確保、すぐに完璧を求めないで常にトライアンドエラーができるくらいの柔軟さが必要。常に成長していく、時代の必要なニーズを汲み取って成長していけるような図書館であってほしいと思う。あまり固まってしまうと、これからの時代、既に情報化社会になっているが、現在想定していないこともどんどん起こり得る時代である。これに対応できる人材の育成と雰囲気作りができて、山形のこれからの未来を作っていくことに寄与できるような図書館になればと思う。

大沼委員

これまで議論してきたことがどれだけできるかにかかっていると思う。雰囲気の良い素敵な図書館はすぐにはできない。それを作っていくにあたり、いいチームづくりが必要で、そこに力を割く、気にかける必要がある。これで終わりではなく、あとは素敵な場所づくりを行ってほしい。また、「県立図書館はすごいな」と思われる、また利用するきっかけのチャンスであるので、新しい価値を生み出せるように、これまで近寄りがたかったかもしれない県立図書館がぐっと身近なものになるように、県民が関われる図書館になってほしい。

新藤委員

これで基本計画が固まりつつあるが、県民の方の声で生涯学習センターと県立図書館の区別がつかないというものがあつた。図書館は生涯学習・社会教育施設であり、最近では全国的に整備が進んでいて、今までは取り上げられなかった図書館が、悪いニュースではあるが注目されてきているので、図書館を今後どのように変えていくのか、もしくは変えなければならないのか、柔軟な発想をもって今回限りではなく、継続して考えることが重要。そのためには、人的基盤・スタッフが重要である。難しい話であるが、図書館の役割も常に変化、多様化していて、武雄市図書館は多様に対応していこうとしていたが、図書館とは何かという根本の部分がおおざりになってしまった結果が現状である。図書館はこうあるべき、こうでなくてはならないという意見があつて、それを覆す

ことも重要であるが、まずは図書館がどういうことをする場なのかという最低限の公約を守らないと、図書館なのか生涯学習センターなのかゲームセンターなのかよくわからない施設になってしまう。図書館のやる範囲、守るべきものは時代とともに変わるかもしれないが、枠を設定して図書館はこういうサービスができるということをしていかなないと、利用者からみて何の施設だかわからなくなってしまう危険性もある。例えば、発展途上国の大学図書館はパソコンがメインで、本は横に少ししかないというところが結構あるようで、図書館というよりも情報センター、情報の集積基地になっている。世界的に議論にもなっているが、図書館の枠組みがゆらいできている。図書館は一体何をすところなのかをある程度設定したうえで考えないと、よくわからないものになってしまう可能性がある。そこを最初に考えてもらいたい。今回の基本コンセプトはしっかりしたものができているが、これを押えたうえで進めていかなければならない。

(2) その他

質疑特になし

4 その他（大場生涯学習施設主査）

- ・第5回活性化検討委員会は2月5日（金）に県庁で開催する予定。

5 閉会